



Osaka Mozart Ensemble
64. Konzert

Orchester
Konzertmeister

Osaka Mozart Ensemble
Masato Ohnishi

14:00 Uhr Sonntag, 22. Januar 2017

Toyonaka Aqua Bunka Hall

《Programm》

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング アマデウス モーツァルト

Der Schauspieldirektor KV 486 (1786)

音楽付き喜劇「劇場支配人」より序曲

Ouverture: Presto

Arie (Rondo) für Tenor und Orchester „Per pietà, non ricercate“ KV 420 (1783)

「どうか、詮索しないでください」

Rondo: Andante - Allegro assai - Adagio - Primo tempo

Arie für Tenor und Orchester „Miserò! O sogno“ - „Aura, che intorno spiri“ KV 431(425b) (1783)

「あわれな男よ！夢なのか、それともうつなのか？ - あたり吹くそよ風よ」

Recitativo: Adagio - Andante con moto - Allegro risoluto - Andante sostenuto

Aria: Andante sostenuto - Allegro assai

Davidde Penitente „A te, fra tanti affanni“ KV 469 (1785)

カンタータ「懺悔するダビデ」第6曲「数知れぬ苦しみのさなかで」

Nr.6 Aria: Andante - Allegro

..... 休憩 Pause

Die Entführung aus dem Serail KV 384 (1781-1782)

ジंकシュピール「後宮からの誘拐」より、序曲、アリア(第1番)、レチタティーヴォとアリア(第4番)、行進曲(第5番a)

トルコ近衛兵の合唱(第5番b)、アリア(第15番)、アリア(第17番)、トルコ近衛兵の合唱(第21番b)

- I. Ouverture: Presto - Andante - Primo tempo
 - II. Nr.1 *Aria*: Andante
 - III. Nr.4 *Recitativo ed Aria*: Andante
 - IV. Nr.5a Marcia
 - V. Nr.5b Chor der Janitscharen: Allegro
 - VI. Nr.15 *Aria*: Adagio - Allegretto
 - VII. Nr.17 *Aria*: Andante
 - VIII. Nr.21b Chor der Janitscharen : Allegro vivace
-

《Einführung》

松原 友 (まつばら とも) *Tenor*

東京藝術大学卒業。同大学院修了。ロームミュージックファンデーション、野村財団奨学生としてミュンヘン音楽大学大学院、ウィーン国立音楽大学リート・オラトリオ科卒業。

第51回全国学生音楽コンクール全国大会第1位。第14回松方ホール音楽賞、第81回、83回日本音楽コンクール第3位・岩谷賞（聴衆賞）、第71回文化庁芸術祭新人賞受賞。

これまでヨーロッパ、日本各地でのリサイタル、オラトリオの公演をはじめ、ミュンヘン放送管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団等のオーケストラ共演。NHK名曲リサイタル、リサイタルノヴァ、ルールトリエンナーレ、小澤征爾音楽塾、サイトウキネンフェスティバル、PMF音楽祭に出演。小澤征爾、ウルフ・シルマー、準・メルクル、イング・メッツマッハー、ハルトムート・ヘンヒェン、大植英次、山田和樹 他、国際的な指揮者と共演を重ねる。ミュンヘンプリンツレグテン劇場、関西二期会、兵庫県立芸術文化センター、びわ湖ホール等のオペラ公演に携わる。



©岩谷義宜/aura.Y2

同志社女子大学、相愛大学、大阪音楽大学、大阪府立夕陽丘高校音楽科各非常勤講師。東京二期会会員。

大阪モーツァルトアンサンブル *Osaka Mozart Ensemble*

1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4～5回の演奏活動を行っている。指揮者を置かずに自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリントツ氏、アダルベルト・スコチッチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にスベトラ・プロティッチ氏と4回共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲をレコーディングした。1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7回出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルテウム大ホール、ヴィーン・ミニリーテン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5回出演。2004年、指揮者なしでのモーツァルトの交響曲全曲演奏を20年かけて完結した。



アーダムベルガーとモーツァルト

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

1777年10月2日、母とミュンヘンに滞在中のモーツァルトから父に宛てた手紙に、当地の伯爵の料理人の娘カイゼリーンという人が女性の第一歌手だと伝えている。

とても感じのいい娘で、舞台姿も美しいのですが、まだ近くで見たことはありません。彼女はここ生まれで、ぼくが初めて聴いたのは、まだやっと三度目の舞台でした。彼女は、強くなければ弱くない、美しい声の持ち主です。非常に澄んでいて、見事な抑揚です。彼女の先生はヴァレージですが、彼女の歌から推して、先生が歌の教え方を心得ているばかりか、自分でも立派に歌える人であることがわかります。彼女が数小節声を持続しただけで、いかにそのクレッシェンドやデクレッシェンドを美しくだすか、ぼくはまったく驚きました。彼女はトリラーを一段とゆっくりかけるので、じつにうれしくなりました。というのは、いつかもっと速くかけようと思えば、それだけいっそう澄んではっきりしますからね。もともと速いほうがやさしいに決まっています。——(中略)——オペラ・グラスでカイゼリーン嬢を注目しましたが、なんども涙が流れました。ぼくはたびたび、「ブラーヴァ、ブラヴィッシマ！」と叫びました。というのも、彼女が舞台に出てやっとこれが三度目だといつも念頭においていたからです。

カイゼリーン嬢の先生はヴァレージとある。1756年からバイエルン公子クレメンス・フランツ・デ・パウラの元に仕えていたヨーハン・バプティスト・ヴァリスハウザーのことで、公子は彼をイタリアに送り、留学後、かれにジョヴァンニ・ヴァレージというイタリア名を贈った。弟子の中には、カール・マリア・フォン・ヴェーバーやヨーハン・ファーレンティーン・アーダムベルガーがいる。前者はモーツァルトの妻コンスタンツェの従弟で「魔弾の射手」の作曲者としてその名は広く知られている。後者は、本日の演奏会のテーマに選んだテノール歌手である。アーダムベルガーは、1740年2月22日、ニーダーバイエルンのロールで生まれた。1743年7月6日にミュンヘンで生まれたとの説もある。1755年からミュンヘンのイエズス会ドームス・グレゴリアーナでヴァリスハウザー（ヴァレージ）に師事し、1760年にクレメンス公子の合唱団に入団した。1770年、公子の崩御と同時にミュンヘンのバイエルン選帝侯宮廷楽団に入団。1772年、ミュンヘンのオペラにデビューした後は、1775年から1777年までヴァレンチノ・アダモンチのイタリア名でモデナ、ヴェニス、フィレンツェ、ピサ、ローマにおいて、その後、1779年までロンドンのキングズ劇場において、オペラ・セリア（正歌劇）の主役テノール歌手を務めた。その後、フィレンツェやミラノで活躍した後、1780年ウィーンの皇王室国民劇場と契約し、同年8月21日にウィーンデビューを果たした。ウィーンでは皇帝ヨーゼフ2世の寵愛を受け、1781年の年収は、2130フロリンという高給であった。ちなみに、モーツァルトが、1787年、グルックの後任の宮廷作曲家として雇用された時の年棒は800フロリンであった。モーツァルトがウィーンに来たのが、1781年3月16日。アーダムベルガーが見知らぬ土地に着任した時期と半年ほどしか変わらない。モーツァルトは、ヨーロッパ中で名声をほしいままにしていたアーダムベルガーに惚れ込み、生涯の友として数々の名曲を作曲することになるのである。



アーダムベルガー

1782年の一般劇場年鑑に1781年のウィーンにおける劇場シーズンの演劇・オペラの演目や人物のリストが掲載されている。雇用された日付の順に記載された男性リストの最後にアーダムベルガーの名前がある。

10、ヨーゼフ [正確にはヨーハン・ファーレンティーン] アーダムベルガー氏は、ミュンヘン生まれで、イタリアに滞在中にウィーンオペラに雇われた。1780年に『迫害された見知らぬ女』[アンフォッシのオペラのドイツ語版]のアストゥルバル役でデビューした。彼は、テノール歌手で、主役の若い恋人たちをこなし、優しく、情熱的な役柄を得意とする。

一方、師のヴァレージは、1735年、フルステンフェルトブルック近郊ウンターハッテンホーフェンの生まれで、フライジングの領主司教ヨハン・テオドールの宮廷歌手を務めていた。1770年、バイエルン公子の没後にミュンヘンのバイエルン選帝侯宮廷楽団に入団。1781年1月29日に初演されたモーツァルトの歌劇「クレータの王イドメーネオ」KV 366（バイエルン選帝侯カール・テオドールから謝肉祭用に作曲を委嘱され、キュヴィリエ劇場で初演）にポセイドンの大祭司役で出演していることが、初演時の台本に記されている。1774年の9月頃、バイエルン選帝侯マキシミアン3世から謝肉祭用に作曲を委嘱された歌劇「偽の女庭師」KV 196の初演（1775年1月13日、ザルヴァートル劇場）にも歌手として参加したと考えられている。従って、モーツァルトは、ミュンヘンですでにアーダムベルガーと出会っていたかもしれない。少なくとも、彼のことをヴァレージから聞いていたことは容易に想像できる。ちなみに、1777年、バイエルン選帝侯マキシミアン3世が死去し、バイエルン系ヴィッテルスバッハ家が断絶したため、マンハイムのプファルツ選帝侯カール・テオドールがバイエルン選帝侯を継承した。その際、当時、マンハイム楽派としてその名を馳せたマンハイム宮廷楽団を引き連れてミュンヘン入りしている。

1780年11月5日、モーツァルトは「イドメーネオ」上演のためにザルツブルクを出発し、石のように固い座席の駅馬車で一睡もできないまま、翌日午後1時にミュンヘンに到着した。その晩、早速、上演の打ち合わせをするためにミュンヘン国民劇場の総監督ヨーゼフ・アントン・ゼーアウ伯爵を訪ねている。11月13日にザルツブルクに住む父へ1通の手紙が書かれる。

ザルツブルクのザルツブルク大司教宮廷楽長
レーオポルト・モーツァルト様

ミュンヘン、1780年11月13日

親愛なお父さん！

大急ぎで書いています。まだ服を着かえていませんし、ゼーアウ伯爵邸へ行かなくてはなりませんから。カンナビヒ、クヴァーリオ、それからバレエ師のルグランたちも、オペラに必要なことを申し合わせるために、伯爵邸で食事をしているのです。――

きのう、レルヒェンフェルト家出のパウムガルテン伯爵夫人邸で、カンナビヒと一緒に会食しました。――ぼくにとって、この邸は最上の便利な家です。というのは、彼らの好意のおかげで、あらゆることがぼくに関してうまくいっていますし、これからも――神の思召し次第で、うまくゆくでしょう。

彼女は、お尻にしっぽがあって、きつねのように振っています。におうばかりの肌の色、イヤリングはきらきらと、リング輝く愛妾姫。のんで歌って踊りあかして、おんな盛りを愛した末は、うんも尽きはてたぼった、なんと哀れな鼻なし男。以上、知恵ことば。

この知恵ことば（謎文字）は、モーツァルトがしばしば手紙で使った言葉遊びである。原文は、Sie ist die, welche einen Fuchsschwanz im Arsch und eine spitzige Uhrkette am Ohr hängen hat und einen schönen Ring, ich habe ihn selbst gesehen, und soll der Tod über mich kommen, ich unglücklicher Mann ohne Nase.で、高橋英郎先生の訳は、読者に言葉遊びの楽しさが伝わるよう工夫されている。正確な訳は、「キツネの尻尾（Fuchsschwanz）をお尻（Arsch）にさし、尖った時計の鎖（Uhrkette）を耳（Ohr）にぶら下げ、見事な指輪（Ring）をした女性が彼女です。ぼく（ich）はこの目でその指輪を見たのです。万が一、死（Tod）が僕の上に訪れるとしてもです。小生（ich）鼻（Nase）の無い不幸な男」で全く意味不明であるが、この文章に、Fauoritin (Favoritin) = お気に入りの女性、が隠されている。すなわち、カール・テオドール選帝侯の寵姫、ヨゼファ・パウムガルテン伯爵夫人のことである。この手紙で述べられているように、モーツァルトのオペラを作りたいという希望は、パウムガルテン伯爵夫人の仲介で実現することになったのである。モーツァルトがザルツブルク大司教から許可された休暇は6週間であったが、彼はオペラの上演後も優れた音楽家が集う居心地の良いミュンヘンに留まった。業を煮やした大司教から至急ヴィーンに来るよう命令が下り、3月12日にヴィーンに向けてミュンヘンを出発した。その4日前にパウムガルテン伯爵夫人にこれまでのお礼として作曲したのが、「憐れな私よ、ここはどこなの？ - ああ、語っているのは私ではない」KV 369である。3月7日から10日まで父の故郷アウグスブルクに父姉とともに出かけただので、ヴィーンに出発する前日に催された歓送の音楽会でパウムガルテン伯爵夫人に感謝をこめて捧げられたと推察される。

♪ ♪ ♫

1781年8月1日、モーツァルトはザルツブルクに住む父に宛てた手紙で、「一昨日、ゴットリーブ・シュテファニーから、9月半ばにロシアの大公がヴィーンを訪問する際に上演するオペラを作曲するよう、台本を渡された。」と伝えている。皇帝から直接モーツァルト

トに作曲依頼があったのではなく、宮廷オペラ監督のシュテファニーに「何か適当なものはないか。」と皇帝から問われたときに、「モーツァルトが特別なオペラを書いている。」と答えるためであった。ザルツブルクの宮廷を解雇され、ウィーンで活動を開始したばかりのモーツァルトにとって願ってもない話だった。

この台本は上出来です。主題はトルコ風で、題名は『ベルモントとコンスタンツェ』別名『後宮からの脱出』です。——序曲、第一幕の合唱、それにフィナーレの合唱は、トルコ風の音楽で書くつもりです。カヴァリエーリ嬢、タイバー嬢、フィッシャー氏、アーダムベルガー氏、ダウアー氏、そしてヴァルター氏が歌うことになっています。——この台本を作曲するのがとても楽しいので、カヴァリエーリの最初のアリア、アーダムベルガーのアリア、それから第一幕を締める三重唱をもう書きあげてしまいました。時間の余裕がないこと、これは確かです。なにしろ、9月の半ばにはもう上演の予定ですから。——しかし——これが上演される頃の周囲の状況、そしてことに——ぼくが他に期待していることのすべてを思うと——晴れやかな気分になり、最高の情熱に燃えて机に飛びつき、最大のよろこびをもってそこに座り続けています。

こうして、ジクシュピール（歌劇）『後宮からの誘拐』KV 384の作曲が急ピッチで、しかも極秘で進められた。モーツァルトが極めて短期間でオペラを仕上げる実力を持っていることを皇帝や宮廷劇場監督のローゼンベルク伯爵に示し、また、ローゼンベルク伯爵自身がモーツァルトに作曲を命じたことにするためであった。シュテファニーが何年も前からモーツァルトと懇意であることを彼らに知られないようにする必要があった。事実、このことを知っていたのは、ベルモンテ役を演じたテノール歌手のアーダムベルガーとオスミン役のバス歌手フィッシャーだけであった。モーツァルトはベルモンテのことをBelmonteと書くこともあれば、台本のBelmont und Constanzeのように、ベルモントBelmont, Bellmont, Bellemontと記載することも多かった。ヨハン・イグナツ・ルートヴィヒ・フィッシャーは、アントン・ラフ（イドメーネオの初演の際、イドメーネオ役で出演したときはすでに67歳の老齢であった）の弟子で、ザルツブルク大司教コロレードに「バス歌手にしては低く歌い過ぎる」と酷評された人物。しかし、モーツァルトは、彼のために「ザルツブルクのミダス王（音楽神アポロンにより驢馬の耳にされた音痴）がなんと言おうとも彼の美しい深みのある声が輝くような（1781年9月26日付の父への手紙）」アリアを追加できるよう、シュテファニーに台本を変更してもらっている。「ははは、勝ちどきをあげたいね、お前たちが刑場にひかれていく時、そして首をしめられる時！」と歌う第19番の恐ろしいアリアでは、低い二音（D）が8小節間も続く。

8月8日付の父への手紙で、12時過ぎにトルコ近衛兵の合唱（第5番b）を書き上げ、「アーダムベルガー、カヴァリエーリ嬢、それにフィッシャーはそれぞれ自分のアリアをすごく気に入っています。」と伝えている。8月22日付の父への手紙で、第一幕が出来上がったことを知らせる。8月29日付の父への手紙で、「ロシアの大公訪問は11月に延期になったので、ゆっくりオペラを書けることになり、うれしい。」と伝えている。しかし、9月12日付の父への手紙で、「グルックの『イフィゲーニエ』のドイツ語版と『アルチェステ』が上演されることになったので、俳優たちに3つ目のオペラを練習させるのは無理だ。」と伝える。その後、モーツァルトは父に郵便の超過料金を支払わせることになるオペラの膨大な「試食品Praegusto」をザルツブルクに送った際、登場人物を述べている。これらの配役は1782年7月16日になってやっと初演された際のメンバーと同じである。

——登場人物は次の通りです。

太守ゼーリム——ヤウツ氏。歌わない役者。

コンスタンツェ——ベルモントの恋人。カヴァリエーリ嬢。

ブロンデ——コンスタンツェの侍女。タイバー嬢。

ベルモント——アーダムベルガー氏。

ペドリロ——ベルモントの召使いで、太守の庭番。ダウアー氏。

オスミン——太守の別荘の番人。フィッシャー氏。太鼓腹の男、バス歌手。

9月26日、第一幕についての考えを伝えている（曲の順に文章の順番を入れ替えた）。

序曲については、14小節しかお送りしていませんね。——これはまったく短くて——強弱が絶えず入れ替わるのですが、フォルテのときはいつもトルコ音楽が入っています。——それはつぎつぎに転調していきます。——そして、一晩中眠れなかった人でも、ここで眠るわけにはいかないとしますよ。——

オペラはモノローグで始まっていたのですが、それを小さなアリエット【第1番】にして——さらに、オスミンの短い歌のあとに、二人が一緒におしゃべりをするのではなく、二重唱がくるよう、シュテファニーに頼みました。

さて、ベルモントのイ長調のアリア【第4番】「ああ、なんと不安な、ああ、なんと燃えるような」がどんな風に表現されたか、御存知ですね。——愛に溢れた胸のときめきも——オクターヴの2つのヴァイオリンで示されています。——これは、聴いた人みんなのお気に入りのアリアで——ぼくも気に入っています。——そしてこれはアーダムベルガーの声にぴったり合うように書かれています。——震え——おののくさまが分かります。——高鳴る胸の鼓動が——これはクレッシェンドによって表現されています。——囁きと溜息が聞こえます。——これは弱音器付きの第1ヴァイオリンと1本のフルートのユニゾンで表されています。

トルコの近衛兵の合唱【第5番b】は、これ以上合唱としては望めない、文句なしの出来栄です。——短くて陽気で——まさにヴィーン人向きに書かれています。

ここで、モーツァルトは、ベルモントのアリア【第4番】の9小節目から囚われているコンスタンツェに「愛に溢れた胸のときめき」を表現し、28小節目から「震えおののく」様を表している。そして、33小節目から39小節目にかけて高鳴る胸の鼓動が聞こえ、39小節目の全休止のあと、40小節目から彼女の囁きと溜息が「弱音器付きの第1ヴァイオリンと1本のフルートのユニゾンで」表されると述べている。しかし、自筆譜に弱音器使用を意味するcon sordinoの指示は見当たらない。指示を書き忘れたのであろうか。私たちが39小節目の全休止で弱音器を取り付けるとして、これをどこで外すのかを議論した。66小節目にアリアの冒頭が再現され、73小節目に再び第1ヴァイオリンとフルートのユニゾンが現れる。しかし、72小節目には全休止は無く、どこからどこまでを弱音付きで演奏するのか結論に至らなかった。新全集の編集者は、第1ヴァイオリンを弱音器あり、なしの2つのグループに分けて演奏する案を提案しているが、モーツァルトは本当にそんなことを意図したのであろうか。モーツァルトはフルートにはpia:を、ヴァイオリンには、con sordinoの代わりにpp:を書き入れ、フルートの1オクターヴ下をなぞる様にした。当初、弱音器をつけたヴァイオリンで演奏することを意図していたが、最終的には弱音器を使わないでピアノシモに変えたのである。

10月6日付の父への手紙で、オペラの上演が延期になることを伝えている。

ぼくはこれ以上別のオペラを書かないでいるなんて、もう我慢できそうにありません。——もちろん、いまのところ別のものも作曲しています。——でも——ぼくの情熱は挙げてオペラに向けられていて——いつもなら二週間かかる曲でも、いまなら4日で書けるでしょう。——ぼくはアーダムベルガーのイ長調のアリア、カヴァリエーリ嬢の変口長調のアリア、そして三重唱を1日で作曲し——1日半で書き上げました。——でも、オペラが全部完成したって、どうにもなりません。——どうせグルックの二つのオペラが完成するまで、ぼくのはお蔵入りでしょうから。

そんな中、10月13日付の父への手紙に、モーツァルトのオペラの台本に対する興味深い考えが述べられているので引用しよう。

ベルモントのアリア「ああ、なんと不安げに……」は、音楽のための詩として、まずこれ以上に書くことはできないでしょう。——《さっさと》と《苦しみが私の膝に休らう》（苦しみが——休らうなんてありえません）を除けば、このアリアも悪くないでしょう。ことに最初の部分は。——そしてどうやら、オペラでは、詩は音楽の従順な娘でなくてはなりません。——イタリアの喜歌劇がなぜいたるところでうけるのか？——ひどい台本にもかかわらず！——パリでさえも、そうです。——ぼく自身、それについて目撃しています。——オペラでは音楽が完全に支配していて——そのためにすべてを忘れさせるからです。——それだけにいっそう、オペラは作品の構想がうまく構成されていなくてはなりません。言葉はひたすら音楽のためにのみ書かれていて、あちらこちらで韻を踏むために（韻は、誓って言いますが、どんな価値があろうとも、舞台の演出効果を高めるものではなく、かえって効果をそこねるものです）作曲者の全体の構想をぶちこわすような言葉や詩句が挿入されたりしなければ、必ず喜ばれるでしょう。——詩は音楽にとって不可欠な要素であることは確かですが——でも韻は——それが韻を踏むための韻だったら、もっとも有害なものです。——そんな学をひけらかすような方法で仕事にかかる作曲家先生は、必ず音楽もろとも失敗の憂き目にあいます。——

10月23日、ブルク劇場でグルックの『タウリスのイフィゲーニエ』が初演された。11月25日、シェーンブルン宮殿で『アルチェステ』が初演され、やっとモーツァルトにチャンスが回ってきた。1782年5月29日付の父への手紙で、オペラが完成し、6月3日にブルク劇場でリハーサルが開始されることを伝える。

あした、ぼくはいとしいコンスタンツェと一緒に、トゥーン伯爵夫人のところで昼食をともにし、そのあと『後宮』の第三幕を夫人のために演奏することになっています。——さしあたって今、ぼくはとても退屈な仕事しかありません。——つまり、校正です。——来週の月曜日に、第一回のリハーサルをする予定です。——正直のところ、このオペラを実に楽しみにしています。——

本日の演奏会で取り上げるベルモンテのアリア（第15番と第17番）では、大幅な修正がなされている。自筆総譜に残されている譜面は、現存する手書きの総譜、パート譜、印刷譜とまったく異なる。第15番の自筆総譜は20枚の五線紙が使われており、モーツァルトの手で20枚のうち6枚が大きな×で削除され、修正の跡が残っている。改訂された時期および理由は明らかになっていないが、おそらく第1回のリハーサル後であろう。10度の跳躍があり大変技巧的で長大な15番のアリアがアーダムベルガーにとって負担だったのかもしれない。17番のアリアは、明るめのインクで大幅に書き直した跡があり、技巧的なパッセージを追加し、華やかに仕上げている。インクの色が異なることから、修正した時期は第15番とは異なる可能性が高い。まさにモーツァルト自身が「アーダムベルガーの声にぴったり合うように書かれています。」と手紙で書いているように、修正したのであろう。本日の演奏会では、アーダムベルガーとモーツァルトの関係に焦点を当てているので、オリジナルの版ではなく「アーダムベルガーの声にぴったり合うように書いた」修正版で演奏する。

1782年7月16日午後6時半、『後宮からの誘拐』KV 384がブルク劇場で初演された。7月20日、ザルツブルクに住む父に宛てた手紙に、第1回目の公演は大好評だったが、19日に行われた二回目の公演は、陰謀があり、野次られ通しであったことが述べられている。

ぼくのオペラが好評だったことをお知らせしたこの前の手紙、たしかに届いたのでしょね。——きのう、二度目の公演がありました。——きのうは初日よりさらにひどい陰謀があったなんて、信じられますか？——第1幕は絶えず野次られ通しでしたが、それでもアリアの間のブラヴォー！の歓声を止めるわけにはいきませんでした。——そこでぼくはフィナーレの三重唱に望みをかけたのですが——不運にもフィッシャーが間違えてしまい——そのためにダウアー（ペドロロ役）までしくじりました。——そうなると、アーダムベルガーだけでは三重唱を持ちこたえられず——その結果、まったく効果が失われ、今回は——アンコールされませんでした。——

ぼくは、アーダムベルガーもそうですが、怒りのあまり逆上して、（歌手たちに）少し稽古をつけないかぎり、二度とこのオペラを上演しないと——即座にいました。——二幕では、初日と同様に、二重唱が両方ともアンコールされました。それにベルモンテの Rond 「喜びの涙が溢れるとき」も同様でした。

当時、ウィーンの宮廷に仕えていた政治家カール・ツィンツェンドルフ伯爵の日記には、7月30日、次のように記されている。

今晚壮大なオペラ『後宮からの誘拐』、音楽は他の雑多なものからの剽窃の寄せ集め。フィッシャーの演技は良かった。アーダムベルガーは彫像のようだった。

かなり手厳しい批評であるが、アーダムベルガーは神話や古代の英雄伝が題材になっているオペラ・セリア（正歌劇）が専門だったので、こういったオペラには向いていなかったのかもしれない。しかし、『後宮からの誘拐』は、大変好評で、1782年には合計12回、83年には3回ブルク劇場で上演されたあと、さらにウィーン・ケルトナートーア劇場などで27回もモーツァルトの生前に上演されている。しかし、ウィーンの歌手のオペラにおける演技レベルは、それほど高くはなかったようである。1776年以来、ライプツィヒで刊行されている「ドイツ詩神の館」には、1781年3月31日付のウィーン通信として以下の一節がある。

オペレッタに関しては、この人たちの演技ほど硬直していて、ぎこちなく、操り人形みたいなものは考えられないことを申し上げないわけにはまいりません。オペレッタがなぜコンサートにならないのか理解できません。アーダムベルガー氏は首席テノール歌手ですが、ロンドンやイタリアの諸都市で歌って大成功を収めました。これは彼の名譽のために言うておく必要があると思います。でも、私には彼の歌にも演技にも魂が入っていないように思います。フィッシャー氏はかつてマンハイムで歌っており、ドイツ随一のバス歌手と知られていますが、ギンターに次いで演技も最良です。——（中略）——ランゲ夫人、旧姓ヴェーバー嬢は、プリマ・ドンナで、まことに心地よい声を持っていますが、劇場には弱すぎます。カヴァリエーリ嬢の声は比較にならないくらい強いものですが、まったく特別の声質を持っています。加えて彼女はおそろしく嫌な声で、あまり目が利かず、二人とも演技は気の毒なくらい下手です。タイバー嬢は次々席ですが、女性歌手のなかでは演技が一番です。——（中略）——オペレッタでも、芝居と同様、人材不足だということ

がおわかりになれましょう。

プラハ・クラインザイト・ギムナージウム教授フランツ・ニーメチェクが、1798年に著した「皇王室宮廷楽長ヴォルフガング・ゴットリープ・モーツァルトの生涯 オリジナル資料に基づく」に「後宮からの誘拐」の記載がある。

このオペラは大好評であった。しかし、狡猾なイタリア人たちは、このような人物はやがてイタリアのがなり立てる音楽を危うくするのではないかとみてとった。ほどなくしてイタリア的な毒をもった極めて激しい嫉妬が起こった。ヨーゼフ皇帝は基本的にはこの新しく感動的な音楽に魅了されてはいたが、モーツァルトに次のように言ったのである。「私たちの耳にはとても美しいが、音が多すぎやしないかね、モーツァルト君。」

「ちょうど必要なだけでございます。陛下。」モーツァルトは、いかにも偉大な精神の持ち主にはふさわしいあの高潔な誇りをもって率直にこう答えた。彼は、この言葉が皇帝自身の意見ではなく、他人の口まねであることを見抜いていたのである。

本日、演奏する曲目は以下の8曲である。

1. 序曲 八長調
2. 第1番 八長調 ベルモンテのアリア：スペインの貴族ベルモンテの愛人コンスタンツェと侍女ブロンデが自分の下僕ペドリロともども海賊にさらわれ、トルコの太守セルムの後宮に幽閉されている。愛人を取り戻すために太守の後宮にやってきたベルモンテが「ここで君に会える、コンスタンツェ！」と歌う。
後宮の番人オスミンがやってきてベルモンテを追い払い、「まずは首切り、それから吊るし、そのうえ真っ赤に焼けた棒で串刺しだ、それから焼いて、縛りつけ、水にひたして、最後に皮を剥ぐ。」とキリスト教徒に対する憤怒を歌う。
3. 第4番 イ長調 ベルモンテのアリア：ベルモンテはペドリロと再会し、逃走の計画を練る。「コンスタンツェ、君に再び会える。ああ、なんと不安げに、ああ、なんと燃えるように、私の心はときめくことだろう」と不安と再会の喜びに心乱れる。
4. 行進曲第5番a：そこに太守がコンスタンツェを伴って遊宴船で帰還したことを知らせる行進曲が流れる。（ベルリンのプロイセン文化財団国立図書館に保管されている総譜（ウィーンで写譜された極めて初期の版）のみに現れるこの行進曲は、写譜屋がその自筆譜を紛失してしまったらしい。そのため、1980年に発見されるまで、この行進曲は知られていなかった。9つの管楽器とドイツ太鼓とトルコ太鼓が使用されているが、トルコ音楽に特徴的なズルナを連想させるオーボエやシンバルなどの打楽器は使用されていない。）
5. 合唱第5番b 八長調：トルコ近衛兵による歓呼の合唱が沸き起こる。
ペドリロは、オスミンを酔わせることに成功、共に「バカス万歳」と歌う。ペドリロは、酔っ払ったオスミンをベッドに運び、ベルモンテはコンスタンツェと再会する。
6. 第15番 変ロ長調 ベルモンテのアリア：二人は再会を抱き合って喜び、「喜びの涙が流れるとき、愛は恋する男にやさしくほほえむ」と歌う。
7. 第17番 変ホ長調 ベルモンテのアリア：ペドリロが船乗りのクラスにはしごを持ってこさせ、真夜中に逃亡を企てる。ベルモンテは、心配で震えながら、「わたしはおまえの強さを信じ、どんな不可能なことも愛によって結ばれる」と歌う。
しかし、4人は衛兵につかまり、しらふに戻ったオスミンの前に引き立てられていく。オスミンは、「ははは、勝ちどきをあげたいね、お前たちが刑場にひかれていく時、そして首をしめられる時！」と歌う。そこに太守が現れ、ベルモンテがかつて自分の許嫁を奪った宿敵の息子だと知る。ベルモンテは極刑を覚悟するが、太守はこれを許し、両カップルは出発する。
8. 第21番b 八長調：トルコ近衛兵は、慈悲深い寛大な太守に万歳を歓呼して幕を閉じる。

このオペラには、モーツァルトの他の楽曲にはめったに使われない特殊な楽器が登場する。Triangoli（トライアングル）、Piatti（シンバル）、Tamburo grande（大太鼓）とG管のFlauto piccolo（フラウトピッコロ）である。Tamburo grandeのパートに記載された音符には、玉の上下に棒が出ていることから、現在使われている大太鼓（バスドラム）とは異なる楽器であることが分かる。モーツァルトが指定した大太鼓は、トルコではダウルと呼ばれる両面太鼓である。肩から太鼓を吊るし、右手で先端にこぶのある太いスティック、左手で細いスティックを持って太鼓の両面を叩き分ける。ブルガリアで広く使われている大太鼓タパンはダウルを起源とする。

ポストホルンセレナーデやドイツ舞曲で使用されるFlautino（フラウティーノ）はソプラニーノコーダーで演奏されるが、フラウト

ピッコロはどのような楽器であったのだろうか。通常のC管フルートより少し短いソプラノフルートなのか、フラウティーノと同じくソプラニーノリコーダーなのか、議論の余地がある。モーツァルトが記譜したG管フラウトピッコロの音域を調べてみると、序曲（f1-f3、第3番はa1-a2、第5番bはg1-f3、第14番はc1-g2、第19番はg1-d3、第21番bはf1-f3と、実にc1からf3（実音ではg1からc4）の2オクターヴ半に及ぶ。この音域をソプラニーノリコーダーで演奏するのは少々無理があるので、3オクターヴの音域を持つ5度高いG管のソプラノフルートが使用されたと考えられる。今回は、残念ながらこの特殊なフルートを入手することができなかったので、C管フルートの半分の長さのC管ピッコロで代用することにした。ピッコロの音域はd2からc5で低い音域をカバーできないため、モーツァルトの記譜通りに演奏することができないことをお断りしておく。



アーダムベルガーは、しばしばモーツァルトの音楽会に登場した。1782年の四旬節の第3日曜日（3月3日）には、「トウン伯爵夫人やアーダムベルガー、その他の親友たちは、ミュンヘンで上演したぼくのオペラ（イドメネオ）から名場面を選んで自分たちに歌わせ、ぼくのほうは協奏曲を1曲だけと即興の幻想曲を弾いて締めたらどうかと勧めてください。」と1782年1月23日付の父への手紙で伝えている。1783年1月22日付の父への手紙では、先週、モーツァルトの下宿先で午後6時から午前7時まで夜通しの舞踏会を開催し、そこには、シュテファニー夫妻やアーダムベルガー夫妻、ランゲ夫妻などが来ていたことを伝えている。そして、1783年3月23日、ブルク劇場ヨーゼフ二世が臨席した御前演奏会が開催され、前述したパウムガルテン伯爵夫人のためのアリア「憐れな私よ、ここはどこなの？ - ああ、語っているのは私ではない」KV 369が歌われる。ソプラノのために書いたこの名曲を歌ったのはアーダムベルガーだったのである。

1781年9月5日、ウィーンに住むモーツァルトが故郷ザルツブルクの父に宛てた手紙に、「パウムガルテン伯爵夫人のために書いたアリアを機会があったら送ってほしい」と依頼している（パウムガルテン、パウムガルテンと表記の違いはあるが、当時、こういった表記の違いはよくあった）。9月12日付け、1782年3月23日付の手紙にも同様の記述があり、5月8日付けの手紙では、「パウムガルテン伯爵夫人に書いた例の曲、早く送ってください。」と催促している。パウムガルテン伯爵夫人のためのアリア（シェーナ、劇唱）が、いつモーツァルトに届いたのかは分かっていないが、1783年3月23日に行われた皇帝ヨーゼフ2世ご臨席のもとで行われた演奏会でこの曲が選ばれている。どうして、このソプラノの歌曲がアーダムベルガーのために、そしてこの大切な機会に選ばれたのかは不明であるが、ザルツブルクへの決別、ウィーンでの自立を決意したモーツァルトの心境がそうさせたのかもしれない。御前演奏会の曲目はモーツァルトが父に宛てた1783年3月29日付の手紙によると以下の通りである。

1: 新ハフナーシンフォニー。2: ぼくのミュンヘンのオペラから、4つの楽器伴奏による、ランゲ夫人の歌うアリア「もし私が父上を失い」。3: ぼくの予約演奏会の協奏曲から、第3番をぼくの演奏で。4: アーダムベルガーの歌う、パウムガルテンのための劇唱。5: ぼくの最近のフィナルムジークから、小コンチェルトシンフォニー。6: 当地で好まれている『二長調協奏曲』をぼくが演奏。これに『変奏曲ロンドー』をつけました。7: ぼくの最後のミラノのオペラから、タイバー嬢の歌う「私は行きます、急いで」。8: ぼくの独奏で小さなフーガ（皇帝がいたので）と、『哲学者たち』というオペラのアリアによる変奏曲—これはもう一度アンコールしなくてはなりません。それに『メッカの巡礼たち』から「愚民の思うは」の主題による変奏曲。9: ランゲ夫人の歌で、ぼくの作曲による新しいロンドー。10: 最初のハフナーシンフォニーの終楽章。



1783年6月21日付けの父に宛てた手紙で、「新しいイタリア語のオペラが上演され、そこに初めて2人のドイツ人の歌手が出演する予定です。それはぼくの義理の姉ランゲ夫人とアーダムベルガーです。それでぼくは、ランゲ夫人のために2つのアリア、そしてアーダムベルガーのためにロンドーを1曲書かなくてはなりません。」と伝えている。このオペラは、パスクワレ・アンフォッシ（1727-97）のオペラ・ブッフア『無分別な詮索好き』で、6月30日に上演されている。この手紙の通り、モーツァルトはアーダムベルガーのために新しいアリア『どうか詮索しないで下さい』KV 420を作曲した。このアリアは、第2幕第4場で、カラドラノ侯爵の新妻クロリンダと侯爵の友人アウレリオとの対話に聞き耳を立てた侯爵が、激しい嫉妬に駆られ、クロリンダを怨んで歌われる。ロンドーで「あわれと思ひ、理由をきかないで。この苦しみを打ち明けたいとも思わない。ただ一体私はどうすればよい？ 希望の光がなければ、何をやっても無駄だ。」と歌った後、アレグロ・アッサイに移って「不運な私の宿命を呪ってもみ、憤ってもみて、私はただ叫びつける。おお、神よ、私に死を与えよ、それだけが私の慰めだ。」と歌う。ここで、モーツァルトは非常に重要な情報を残している。イタ

リア語のオペラに初めてドイツ人の歌手が出演したというのだ。イタリア人音楽家対ドイツ人音楽家の微妙な関係がうかがい知れる。しかし、7月2日付の父への手紙によると、この曲は演奏されなかったと記される。ヴィーンに新しい風を吹き込んだモーツァルトを敵視している旧来のイタリア系音楽家たちが、「モーツァルトがアンフォッシのオペラを改作しようとした」という噂をあらかじめ広めていたからである。

さて、今度はサリエーリの陰謀についてお話する番です。それはぼくよりもアーダムベルガーを気の毒にも傷つけました。——ぼくがアーダムベルガーのために Rondó を書いたことはお話したと思います。——短いリハーサルの間（Rondó の写譜がまだおわらないうちに）、サリエーリがアーダムベルガーを片隅に連れてゆき、もし君がこの曲をオペラに挿入したら、ローゼンベルク伯爵がお気に召さないだろうと言いました。そして、親友として、それを歌わないように忠告したのです。——アーダムベルガーは——ローゼンベルクの意見に逆上しましたが、どう応酬してよいか分からず、時宜を得ない自尊心から、愚かにもこう言いました。——「分かりました。——このアーダムベルガーは、すでにヴィーンで名声を博して、わざわざ自分のために書かれた曲を歌って名を上げる必要がないことを示すために、もともと書かれた曲だけ歌って、生きているかぎり二度とアリアを挿入しません。」——どんな結果になったでしょう？——もちろん、彼は完全に失敗しました。そうなるに決まっていたよ！——今になって彼は後悔していますが、あとの祭です。——もし彼が今日、あの Rondó をもらえないかと頼んできても、ぼくは断りますね。——ぼくのオペラのどれかに、あの曲をごく簡単に使えるでしょうから。——この件でいちばん頭にきたのは、彼の奥さんとぼくの予言が当たったことです。つまり、ローゼンベルク伯爵と当局の幹部たちはこれについて何ひとつ知らず、たんなるサリエーリの策略だったのです。——

ヴィーン楽友協会に残されているブルク劇場のポスターには、1783年12月22日月曜日午後7時から、皇王室国民宮廷劇場（ブルク劇場）では、創設された音楽芸術家協会の義捐興行として大演奏会が催され、5番目にモーツァルトによって演奏されるピアノフォルテ協奏曲、7番目にはアーダムベルガーによって歌われるモーツァルトの作曲による新 Rondó が記載されている。モーツァルトが12月24日に父に宛てた手紙で「おとこの月曜日、また音楽家協会の大演奏会がありました。——ぼくは協奏曲をひとつ弾いて、アーダムベルガーがぼくの Rondó を1曲歌いました。——きのうも同じ演奏会が催されました。」と伝えている。この Rondó は、レチタティーヴォとアリア『あわれな男よ！夢なのか、それともうつなのか？——あたり吹くそよ風よ』KV 431 (425b) ではないかと考えられている。レチタティーヴォで、愛人と別れて死に向かう絶望の男が陰惨な下界に達して、「哀れな私、これは夢を見ているのか、現実なのか。自分はただひとり、悲しみと夜の恐怖の中で、寂しい夜鳥の声をききながら、自分はいよいよここで果てるのか。地獄の扉を開けよ。誰も自分の声に耳を貸すものはなく、わが叫びにこたえるのは山彦のみ、いよいよここで死んでいくのか、せめていとしい彼女にこの溜息で最後の別れを告げたいものだ。」と歌い、アリアでは、「あたりに吹くそよ風よ、わがいとしい人にこの溜息を届けてくれ。私が彼女のために死ぬことを、もう再び会えることはないだろうということを伝えてくれ。」後半はアレグロ・アツサイになって感情が昂り、絶望感から、「まわりの無数の亡霊と多くのその声が私を悩ませる。何たる恐怖、何たる残忍な運命、私は訴え溜息をもらすが、聴いてくれる人もなく、こんな危険にさらされて、助けを求めても、何の同情もない。」と歌う。しかし、この曲は Rondó 形式ではないため、本当にこの演奏会で歌われたのか、議論の余地がある。モーツァルトが頼まれても断るとしたアリア『どうか詮索しないで下さい』KV 420が歌われたのかもしれない。1784年4月1日にモーツァルト自身の義捐興行のための大音楽会でもアーダムベルガーが1曲アリアを歌っているが、この曲はモーツァルトの作曲によるものではないとヴィーン新聞は伝えている。



1785年2月7日、皇帝ヨーゼフ2世は、妹のマリー・クリスティーネ大公妃と彼女の夫で、今はオーストリア領のオランダ総督であるザクセン-テッセン公アルベルトをもてなすために、シェーンブルン宮殿のオランジュリー（オレンジ園、大温室）で昼食会を開催した。部屋の中央に祝祭のテーブルが置かれ、両側に小さなステージが設けられた。上演の際は、観劇できるよう客席を適当な位置に移動させたのである。この日上演されたのは、ゴットリープ・シュテファニー（弟）の台本でモーツァルトの作によるドイツ語劇『劇場支配人』KV 486と、サリエーリの小規模なオペラ・ブッフア（喜歌劇）『まずは音楽、お次がせりふ』である。『劇場支配人』は、モーツァルトの『自作全作品目録』に「2月3日、劇場支配人、シェーンブルンのための音楽つき喜劇。序曲、アリア2曲、三重唱1曲とヴォードヴィルより成る。——ランゲ夫人、カヴァリエーリ嬢、アーダムベルガー氏のために。」と記載されている。ツインツェンドルフ伯爵は、日記の中でこのドイツ語劇は「全体はかなり陳腐であった。」と評している。上演翌日、ヴィーン新聞に詳細が掲載されている。

火曜日、皇帝陛下におかせられては、帝国領ネーデルラント総督殿下ならびに当地の貴族の方がたのために、シェーンブルン宮において娯楽の催しを執り行わせられた。40人の騎士ならびにポニアトフスキー侯がこれに招かれたが、この方がたはみずからお相手の淑女を選ばれ、2人ずつ、幌つきの四輪馬車やドアつき馬車で、3時に当地の宮殿を出発され、大公女殿下クリスティーネを同道された皇帝陛下に同行されてシェーンブルンに向かわれ、同地のオランジュリーでお降りになられた。オランジュリーは、かかる賓客の方がたを昼食におもてなしなされるために、この上なく豪華に、またこの上なく優雅にしつらえられていた。オランジュリーの樹々の下での食卓は、国内外の花々や果物によって心地よいかぎりに飾られていた。皇帝陛下が異国の客人がたならびに招待客の面々とお食事をおとりになられている間、皇王室宮廷楽団が管楽器で演奏を行った。食事が終わったあと、オランジュリーの一方の端にしつらえられた舞台上で、この祝宴用に特別に作曲されたアリアつき芝居の新作で『劇場支配人』と題されたものが、皇王室国民劇場の俳優によって上演された。それが終わると、オランジュリーの別の端にしつらえられたイタリア語劇場の舞台で、同じくまったく新しくこの機会用に書かれたオペラ・ブッファが、『まずは音楽、お次がせりふ』のタイトルで、宮廷オペラのメンバーたちによって上演された。この間、オランジュリーは、数多くのシャンデリアや板ガラスで、まことに燦然と照明が施されていた。9時すぎに、一行はすべて先の順序で、それぞれの馬車がカンテラを持った2人の馬丁に付き添われて、市内に戻って来られた。

食事の間、皇王室宮廷楽団の管楽合奏団が演奏したのは、サリエーリの『トロフォーニオの洞窟』であった。上演当日、ヨーゼフ2世は音楽演劇関係の最高責任者で宮廷劇場の総監督を兼任していたフランツ・クサーヴァー・ヴォルフ・オルシーニ＝ローゼンベルク伯爵に宛てて支払い指示書を送っている。

余は貴殿に同封で1,000ドゥカーテンを送付するが、貴殿はこれを、本日のシェーンブルン宮での祝宴で登用する予定の個々に、以下の割合で分配すべきこと。すなわち

サリエーリに対して	100ドゥカーテン
モーツァルトに対して	50ドゥカーテン
ドイツ語役者10人に対して、1人50ドゥカーテンずつ	500ドゥカーテン
イタリア語オペラ歌手4人に対して、1人50ドゥカーテンずつ	200ドゥカーテン
ブッサーニに対して	50ドゥカーテン
オーケストラに対して	100ドゥカーテン
合計	1,000ドゥカーテン

ブッサーニは有名なブッフォ歌手（道化役）で、当日イタリアオペラのステージマネージャを務めた。ドイツ語役者のうち、ブッフ役がヨーゼフ・ランゲ（モーツァルトの義兄）、フォーゲルザング役がヨーハン・ファレンティーン・アーダムベルガー、ヘルツ夫人がアロイジア・ランゲ、ジルバークラング嬢はカタリーナ・カヴァリエーリであった。ちなみに100ドゥカーテンは1983年の換算で114万7500円であり、配賦された出演料が興味深い。2月11日、18日、25日に劇とオペラはケルントナートール劇場で再演され、2月21日付のヴィーナー・レアルツァイトゥング紙に「モーツァルト氏の音楽もまた、いくつかの非凡な美しさによって際立っていた」との論評が掲載されるなど、異様なほどの喝采と大観衆の中で上演されたとの記録が残っている。



1785年3月6日、モーツァルトは、『自作全作品目録』に次のように書き入れる。

アリア1曲、協会音楽会用にアーダムベルガーのために、『数知れぬ苦しみのさなかで』。伴奏。ヴァイオリン2、ヴィオラ2、フルート1、オーボエ1、クラリネット1、ファゴット1、ホルン2とバス。

ゴットフリート・ファン・スヴィーテン男爵が中心となって設立された音楽芸術家協会は音楽家の遺族の年金を確保するのを目的としていた。モーツァルトは3月に行われる音楽会にオラトリオの注文を受ける。忙しかったモーツァルトは、1783年にコンスタンツェを連れてザルツブルクに里帰りした際に作曲したが、まだヴィーンの聴衆に知られていなかった『八短調ミサ』KV 427 (417a)を転用することに思い至った。『八短調ミサ』は、キリエ、グローリア（グローリア・イン・エクセルシス、ラウダームス・テ、グラーツィアス、ドミネ・デウス、クウィ・トツリス、クオーニウム、イエーズ・クリステ - クム・サンクト・スピリトゥ）、クレードのエト・インカルナトウス・エスト

までと、サンクトゥス、ベネディクトゥスまでが作曲されており、クレードのクルチフィクス以降とアニウス・デイは作曲されなかった。ウィーンに戻る前日、8月25日に行われたミサでは、未完成部はおそらくグレゴリア聖歌かこれまで作曲した別のミサ曲を代用したと思われる。8声の2重合唱で構成される壮大なミサ曲は、完成した部分だけでも1時間近くを要する大曲でモーツァルトの並々ならぬ想いが伝わってくる。オラトリオに転用した際、使用したのは、キリエとグローリア。ロレンツォ・ダ・ポンテの歌詞をこれにあて、さらに2曲を新たに作曲してオラトリオ『悔悟するダビデ』KV 469としたのである。新たに作曲した2曲とは、第6曲と第8曲で、前者はアーダムベルガーのために、後者はカテリーナ・カヴァリエーリのために作曲した。またイエズ・クリステ - クム・サンクト・スピリトゥを転用した第10曲には三重唱のカデンツァを追加している。3月13日の日曜日にブルク劇場で音楽芸術協会のコンサートの予告が出される。この演奏会では、ザルツブルクで作成したパート譜がそのまま使われたらしい。

- 第1曲： 私は主に向かって力弱い声をあげた。（原曲は、キリエ）
- 第2曲： 栄光の賛歌をうたおう。（原曲は、グローリア・イン・エクセルシウス）
- 第3曲： 不愉快な心配は遠のいた。（原曲は、ラウダームス・テ）
- 第4曲： いつも恵みをたれさせ給え。（原曲は、グラーツィアス）
- 第5曲： おお主よ、高め給え。（原曲は、ドミネ・デウス）
- 第6曲： あまたの苦しみのなかで、私はあなたの慈悲を探し求め、主は私の清らかな心を見て、わが祈りをききいれ給え。
- 第7曲： み心のままに、私を罰し給え。（原曲は、クウィ・トツリス）
- 第8曲： 暗く不吉な陰の中に、晴れ渡った空が輝き始める。－美しい魂よ、ああ、喜べ。
- 第9曲： 私を苦しめ追いまわす残念な敵から守り給え。（原曲は、クオーニウム）
- 第10曲： 神にたよる者は、何の危険にも恐れることはない。（原曲は、イエズ・クリステ - クム・サンクト・スピリトゥ）

予告

「1785年3月13日、日曜日。皇室宮殿近くの国民劇場において、音楽協会のために恒例の2部の音楽会が催される。……第2部。この機会にアマデーオ・モーツァルト氏が編曲した新曲のカンタータ。合唱付三声。カヴァリエーリ嬢、ディストラ嬢、それにアーダムベルガー氏により演奏される。」

このころ、モーツァルトの父レーオポルトは上京し、息子夫妻の家に滞在していた。父からザンクト・ギルゲンに住む娘に宛てた3月12日付の手紙に、3月10日の演奏会（ブルク劇場でのクラヴィア協奏曲第21番八長調の初演）、3月11日のメールグルーベの予約演奏会、3月12日のブルク劇場での演奏会など、モーツァルトの多忙な毎日を伝えている。前述したとおり、アーダムベルガーのためのアリアを完成させたのが3月6日、クラヴィア協奏曲第21番の完成が3月9日、カヴァリエーリのためのアリアは3月11日に完成した。

私たちは夜の1時前に眠ったことがいちどもないし、9時前に起きることもなく、2時か2時半に食事をするのです。悪い天気です！毎日毎日演奏会だし、いつも勉強したり、音楽をやったり、書いたりなどしています。私はどこへ行ったらよいのです？

3月13日、ブルク劇場で行われた音楽芸術協会の演奏会の第1部は、ハイドンの交響曲第80番二短調に始まり、ガスマンの合唱曲とハイドンの合唱曲。それに続いて、アリア2曲とオーボエ協奏曲が演奏された。3月15日にも再演が行われ、その時には、アリア1曲とヴァイオリン協奏曲が演奏されている。第2部で演奏されたモーツァルトの新曲カンタータの独唱は、カテリーナ・カヴァリエーリ、エリザベート・ディストラ、ヨーハン・ファーレンティーン・アーダムベルガーによって歌われ、当初、アントーニョ・サリエリが指揮する予定であったが、式次第にあるその名前は線を引いて消され、モーツァルトの名前に置き換わっている。オーケストラの編成は、20本のヴァイオリン、6本から8本のヴィオラ、7本のチェロと7本のコントラバス、2本のフルートに6本もしくは7本のオーボエ（1人は新しく作曲された第6曲のアリアで必要とされるクラリネットを演奏することができた）、6本か7本のファゴット、6本のホルン、2本のトランペット、2本のトロンボーンとティンパニ。当時としては大編成であり、合唱団も約60名の強力なものであった（聖ミハエル教会、ベネディクト派大修道院ショッテンシュティフト、聖シュテファン大聖堂からの少年たちが参加）。演奏者は総数150名ほどになった。第1回目の演奏会の聴衆は660名であったが、第2回目は225名しかおらず、貴族のボックス席はほとんど空席であった。この慈善演奏会では733フローリン13クローネの収益があった。その中には皇帝の50ドゥカーテン（216フローリン40クローネ）も含まれる。

『悔悟するダビデ』の作曲の経緯については、貴重な記録が残されている。1829年7月15日水曜日、ヴィンセント・ゾヴェロが、ザルツブルクに住む67才になったコンスタンツェ（モーツァルトの死後、デンマークの外交官ゲオルク・ニコラウス・ニッセンと再婚したが、1826年3月24日に再び未亡人になった）を訪ねて、インタビューをした時の内容が、彼の日記に残されている。

【質問。『悔悟するダビデ』はどのような事情で書かれたのですか。どの部分が最初はミサ曲としてかかれたのですか】

【ヴィンセント】

『悔悟するダビデ』は元来大ミサ曲で、夫婦の最初の子供のお産で妻が元気に回復したら作曲しますという誓約を果たすために書いたものだった。——初めての子について彼は特に心配していた。このミサはザルツブルク大聖堂で演奏され、モーツァルト夫人が主要なソロを全部歌った。モーツァルトはこの作曲がひどく気に入ったので、後にいくつか追加し、別の歌詞をつけて完全なカンタータにした。このような壮大緻密な傑作をカンタータと呼ぶのでは不足なら、オラトリオと呼ぶべきか。

1783年8月25日、聖ペーター教会でのミサで演奏された『八短調ミサ曲』KV 427(417a)。回想から実に46年前のことであり、コンスタンツェの説明は少々正確さに欠けてはいるものの、モーツァルトがコンスタンツェの健康快復を祈願し故郷の教会に献上する目的で書いたミサ曲だったので、ひどく気に入っていたことは間違いないであろう。

7月24日金曜日、ヴィーンのシュタードラー神父を訪ねた際にも『悔悟するダビデ』のことを質問している。

【ヴィンセント】

モーツァルトはどのような事情で『悔悟するダビデ』を現在のような形に変えたのでしょうか、と神父に尋ねると、こう教えてくれた——モーツァルトがヴィーンに来た時、何かオラトリオ形式の曲を依頼された。まったく新しい曲を作るだけの暇がなかったので、彼はあるミサ曲（既に私が書いたように、ニッセン夫人の説明によれば彼女の最初のお産のためにザルツブルクで作曲されたもの）のかなりの部分を利用し、それに可哀相なダ・ポンテが別の言葉をつけて、さらにモーツァルトが素晴らしいホ短調の三重唱曲と2つの新しい独唱曲を追加して、求められた作品に仕上げたのであった。



本日の演奏会では紹介しないが、アーダムベルガーとモーツァルトの友情関係はこの後もずっと続いた。1785年4月2日付のレーオポルト・モーツァルトから娘に宛てた手紙には、モーツァルト父子が3月29日にアーダムベルガーの家で食事をしたことが述べられている。1785年4月20日に作曲した小カンタータ『フリーメイソンの喜び』KV 471でテノール独唱を歌ったのはアーダムベルガーであった。このころモーツァルトは父親をフリーメイソン結社に入会させ、短期間のうちに親方の位階に昇階させている。このカンタータは、モーツァルト父子が出席した《授冠の希望》分団でのフォン・ボルンの名誉を讃えた祝典式典で演奏された。12月15日に行われた《授冠の希望》分団での集会でも「大いに尊敬すべき盟友ボルンが作詞し、盟友モーツァルトの曲を伴うカンタータが、盟友アーダムベルガーによって」歌われた。オーストリアの外交官で宮廷図書館長であったゴットフリート・ファン・スヴィーテン男爵は、モーツァルトの良き理解者で彼にバッハやヘンデルを紹介し、モーツァルトの創作にも大きな影響を与えた人物として知られている。1788年2月26日、ヨーハン・エステルハーゼ伯爵邸で、スヴィーテン男爵の総監督のもと、86名のオーケストラによって、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハの原曲『キリストの復活と昇天』がモーツァルトの指揮で演奏されたが、その時のテノールを担当したのはアーダムベルガーであった。その後、モーツァルトは11月にヘンデルの『アチスとガラテア』を、1789年3月には『メサイア』をスヴィーテン男爵のために編曲（それぞれKV 566とKV 572）している。この初演にも、アーダムベルガーが歌ったとの記録が残っている。

そして、モーツァルトが生涯で最後に完成した作品もアーダムベルガーのために書かれている。『自作全作品目録』に最後の記入には、「（1791年）11月15日、フリーメイソン小カンタータ。合唱1曲、アリア1曲、レチタティーヴォ2曲、二重唱1曲から成る。テノールとバス。ヴァイオリン2、ヴィオラ、バス、フルート1、オーボエ2、ホルン2。」とある。11月18日の《新授冠の希望》分団の献呈式で演奏された。（2017年1月10日）

【参考文献】

1. Gerhard Croll: Wolfgang Amadeus Mozart, Marsh der Janitscharen für 9 Bläser und 2 Trommeln KV deest aus „Die Entführung aus dem Serail“, Bärenreiter Verlag (1980).
 2. Gerhard Croll: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 5, Band 12: „Die Entführung aus dem Serail“, Bärenreiter Verlag (1982).
 3. Gerhard Croll: Kritischer Bericht, Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 5, Band 12: „Die Entführung aus dem Serail“, Bärenreiter Verlag (1982).
 4. Hendrik Birus, Ulrich Konrad: Wolfgang Amadeus Mozart, Die Entführung aus dem Serail K.384, Facsimile of the Autograph Score, The Packard Humanities Institute (2008).
 5. Stefan Kunze: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 7: Arien Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester, Band 3, Bärenreiter Verlag (1971).
 6. Monika Holl: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie I: Geistliche Gesangswerke, Werkgruppe 4: Oratiren, Geistliche Singspiele und Kantaten・Band 3: Davide Pentiente, Bärenreiter Verlag (1987).
 7. Gerhard Croll: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke, Werkgruppe 5: Opern und Singspiele, Band 15: „Der Schauspieldirektor“, Bärenreiter Verlag (1958).
 8. Spike Hughes: A listener's Guide to Mozart's Great Operas, Dover Publications (1972).
 9. H. C. Robbins Landon: Mozart The golden years 1781-1791 with 215 illustrations, 32 in colour and 27 musical examples, Thames and Hudson (1990).
 10. Stanley Sadie, John Tyrrell: The New Grove Dictionary of Music and Musicians Second Edition, Oxford University Press (2001).
 11. アッティラ・チャンバイ, ディートマル・ホラント 編, 海老沢敏, 畔上司 訳: モーツァルト, 後宮からの誘拐, 音楽之友社 (1988).
 12. 河野淳: ハプスブルクとオスマン帝国, 講談社 (2010)
 13. ジェム・ベバル 著, 新井政美 訳: トルク音楽にみる伝統と近代, 東海大学出版会 (1994)
 14. 伊東信宏: 中東欧音楽の回路 ロマ・クレズマー・20世紀の前衛, 岩波書店 (2009)
 15. スタンリー・セイディ編, 中矢一義・土田英三郎 日本語版監修: 新グローヴオペラ事典, 白水社(2006).
 16. ジェイン・グラヴァー, 中矢一義監修, 立石光子訳: モーツァルトと女性たち 家族、友人、音楽, 白水社 (2015).
 17. アッティラ・チャンバイ, ディートマル・ホラント 編, 海老沢敏, 藤本一子訳: モーツァルト イドメネオ, 音楽之友社 (1989).
 18. ヨーゼフ・ハインツ・アイブル, ヴァルター・ゼン編著, 須永恒雄訳: モーツァルトのベースレ書簡を読む, シンフォニア (1984).
 19. アッティラ・チャンバイ, ディートマル・ホラント 編, 海老沢敏, 畔上司訳: モーツァルト 後宮からの誘拐, 音楽之友社 (1988).
 20. 高野 紀子訳・解説: 初期のモーツァルト伝(モーツァルト叢書18), 音楽之友社 (1992).
 21. メリーナ・メディチ・マリニャーノ, ローズマリー・ヒューズ 共編, 小池 滋 訳: モーツァルト巡礼 - 1829年ノヴェロ夫妻の旅日記 (抄訳) -, 秀文インターナショナル (1986).
 22. 属 啓成: モーツァルト〈II〉声楽篇, 音楽之友社 (1975).
 23. オットー・エーリヒ・ドイッチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル編, 井本 昶二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989).
 24. 高橋 英郎: モーツァルト, 講談社 (1983).
 25. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集III, 白水社 (1987).
 26. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集IV, 白水社 (1990).
 27. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995).
 28. 海老沢 敏, 高橋 英郎: モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001).
-

《Einführung》

Intendant: 武本 浩

Konzertmeister: 大西 正人

Violinen: 柿原 美夏 角谷 祐科 久保 聡一 佐藤 奈津子 田邊 明子

筒泉 直樹 濱田 利正 藤井 聡子 横小路 美貴子

Bratschen: 能勢 徹 河合 士郎 堀井 博子 里上 三保子

Violoncelli: 加納 隆 岩田 暢子 近藤 建

Kontrabaß: 横田 健司

Flöten: 国分 妙子 沼田真奈

Oboen: 小林 靖之 利谷 久美

Klarinetten: 柳楽 由美子 岩尾 牧恵

Fagotte: 尾家 祥介 服部 真貴子

Hörner: 加藤 仁 北脇 知己

Trompeten: 中嶋 香織 由良 美彩季

Pauken: 木村 祐

Schlagzeug: 植木 宥 澄川 竜哉 船戸 哲也



大阪モーツァルトアンサンブル第 65 回定期演奏会

「モーツァルトとクラリネットの出会い」

日時：2017年7月22日（土）午後2時開演（予定）

会場：豊中市立アクア文化ホール

交響曲 第3番 変ホ長調 KV 18

ディヴェルティメント 第1番 変ホ長調 <第2版> KV 113

クラリネット協奏曲 イ長調 KV 622

交響曲 第40番 ト短調 <第2版> KV 550

石澤整形外科

（医師：石澤 命仁）

診療科：整形外科、外科、リハビリテーション科、リウマチ科

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 (9時~12時)	○	○	○	○	○	○
午後 (5時~7時)	○	○	X	○	○	X

豊中市本町7-2-16
TEL：(06) 6852-3371
FAX：(06) 6852-3362